

## 評価について

2021・6・15 重枝 一郎

### ■評価者の心構え

生徒の成績評価は、評価者（教科担任）が、意義や自らの役割を理解した上で評価を行わなければ、制度としては機能せず、評価対象者（生徒）の理解・納得は得られない。評価の基本は、「チェック（管理）のための評価でなく、育成のための評価」である。

### ■客観的事実に基づいて評価する

評価は最終的には評価者自身の主観によって判断されるものという認識が必要である。評価者による偏りのない、客観性の高い評価を実現できるかどうかは、制度上のいろいろな工夫を重ねても最終的には評価者の目にかかっていると言える。しかしながら、客観性を高めるためには、評価者がイメージではなく、事実に基づいて評価を行うことが大切である。

### ■日常的なかかわりを通じて、行動事実をとらえる

日常から授業を通して評価対象者とかわっていないければ、具体的な向上をとらえることはできない。授業を通して、日常的に評価対象者を観察する意識があるかないかで、フィードバック時に評価対象者の納得感に差が出る。

### 上記の原理原則を踏まえて・・・

○授業開きの際に、どのように生徒と意識の共有を行っているか。（評価の納得感，意欲につなげるために）

○授業の際に、どうなれば高い評価になるのか。（評価規準の共有）

○様相チェックの際に、「主体的・対話的で深い学び」が教室の中でどう表れているか（自分の意見をつくれている，他者に働きかけている，真剣に話し合っているなど）

○ある程度，顕著なところを行動記録にしておく（記憶が薄れる，ブれないように）

### ※注意点（これは、学習評価だけでなく、生徒指導、部活動指導にもつながる）

#### ◆ハロー効果

全体の印象に惑わされてしまう（事実の確認・収集が行われていない場合に陥りやすい）

#### ◆寛大化傾向

全体的に甘くなる（評価上の義理人情が働く場合に陥りやすい）

#### ◆厳格化傾向

「寛大化傾向」の反対（「こうあるべき」という主観が強い場合に陥りやすい）

#### ◆中心化傾向

優劣の差をあまりつけないようにしてしまう（格差をつけることが好ましくないと思う場合に陥りやすい）

#### ◆論理誤差

際立った特徴に惑わされて評価が歪んでしまう（評価項目と行動が対応していない、もしくは必要以上に考えすぎて論理的に飛躍させてしまう）

#### ◆対比誤差

自分を基準に評価してしまう。自分が得意なことについては比較的辛く評価してしまう。また、その反対も（評価者の自己中）

#### ◆時期誤差

評価時期に近い行動のインパクトが大きくなりすぎてしまう（記録を取っていない場合に陥りやすい）

#### 定期考査は入試の一部と捉えさせているか（公立中での経験）

- ・特に3年生。
- ・高校からは、9教科の合計値を見られる
- ・公立高校入試では、評定と当日の学力検査の得点が同じ比重で扱われる
- ・私立高校入試でも、学校によっては評定が非常に重視される
- ・「1」は厳しく見られる（観点別の「C」も同様）
- ・学力奨学生制度にも評定は関係する

#### 校長雑感

昨年度の勤務校（中学校）での話である。

『定期考査前に授業での小テストにおいて不正行為が発覚したことは、私たちにとって、今一度、試験監督業務を見直す機会となった。やはり、「不正行為をさせない指導」を行うことが大切となる。職員朝礼で話したことをもう少し詳しく言うと、高校では、テストでの不正行為は「停学」となる。学校謹慎、自宅謹慎と使い分けるが、1～2週間程度相当で行う（臨時生徒指導委員会で協議）。学校内では一日中他の生徒と接触しない場所で、基本自習となる。ただし監督として、生徒部、当該学年、管理職等の先生が必ず割り当てられる（担当割は生徒指導部が作成）。また、休日が含まれる場合は自宅謹慎もある。その際は、主に担当が家庭訪問を行う。なかなかのストレスのかかる業務となる。指導の際は、声を荒げて怒るような指導はしない（罰を受けているため）。当然、部活動もできないが、部活の顧問によっては部としての罰を与えるようなこともあったが、それはしないことを徹底した（二重罰になる）。やはり、他の生徒にも停学はわかるため（こちらから言わないが）、教室復帰へのストレスは生徒本人にも重くのしかかる。よって、定期考査中の職員朝礼は、担任としても、教科担任としても、教務部としても、その緊張感が漂う。普段、体育的な服装の体育科の教員は試験監督の際は、全員スーツ着用という伝統もある（最初はびっくりしたが、カッコいいと思った。心理学的に権威効果）。職員全体でその空気感をつくりだし、定期考査を無事に終わらせようとする一体感がある。上に書いた「定期考査は入試の一部と捉えさせているか」は、評価のことだけではなく、キャリア教育につながる取組でもあると考える。』

明日の「観点別評価」研修会よろしくお願ひします。